

再任用・会計年度任用職員部ニュース

No. 336
2020. 12 16

東京都公立学校教職員組合（東京教組）
再任用・会計年度任用職員部
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 2F
TEL. 03-5276-1311 FAX. 03-5276-1312

非常勤教員の「公募選考」で不合格者が！

ニュース 11 月号で、非常勤教員の公募選考希望者に「1600 字の論文」が課せられたことをお知らせしました。都教委は、論文で「適性を判断する」としています。（非常勤 1～4 年目の方は、「公募によらない再度任用」で、従来通りの申込方法です）

11 月に入り、非常勤教員の合否が本人に伝えられ始めると、東京教組には「公募選考不合格」の連絡が複数届きました。再任用の継続希望ながら校長から非常勤教員の併願を勧められた方、非常勤教員を 5 年勤め、新たに公募選考を申し込んだ方などです。

論文提出後、わずかの期間で合否が下されました。都教委人事課がどんな基準で合否判定をしたのかは不明ですが、現在、再任用や非常勤教員で実際に現場で働いている方が「適性がない」と判断されたのです。

都教委作成のパンフレット「先生！あなたの経験をもっと生かしてみませんか？」では、非常勤教員希望者に「採用数は予算の範囲内です」「時間講師や産育休代替も検討して下さい」と呼びかけています。論文審査と予算の壁で非常勤教員の公募採用を厳しくすることで、非常勤教員の任用数を絞り込もうとしているかのようです。

なお、この問題について、再任用・会計年度任用職員部が都教委に出した質問書に対して、回答がありました。質問の内容と回答は以下の通りです。

- 1 公募による任用を希望する者に 1600 字の論文を課した理由と論文のテーマ発表から提出まで実質 4 日間しかなかったことについて

都 今年度の日勤講師（非常勤教員）の選考について、公募による任用である場合、選考内容を統一化して公平性を図る必要があるため、全て論文試験によるとしたところである。

本来であれば、選考日に会場を確保し試験を行うべきところであるが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、そのような形態で実施できない為、問題等を HP に掲載し郵送で提出してもらう方法とした。不正を防止し、公平性を確保する観点から設定した日程である。

- 2 「公募による任用については、令和 3 年度予算に基づき、合格者数を決定する」となっていることについて

都 会計年度任用職員である日勤講師（非常勤教員）の任用は、会計年度の予算の範囲内でおこなうものである。

3 都教委が作成しているパンフレット「先生！あなたの経験をもっと生かしてみませんか？」で、非常勤教員に関する記載が、2019年度版に比べ2020年度版では大幅に少なくなっていることについて

都 日勤講師（非常勤教員）は、令和2年度から他の非常勤職員と同様に会計年度任用職員に移行したことから、今年度発行のパンフレットでは、会計年度任用職員にかかる記載の中に含めて記載したものである。

4 定年退職後に再任用を希望せず、非常勤教員を希望する場合もある。無年金期間の任用は優先されるべきではないか

都 定年退職する職員が、継続雇用を希望する場合、公的年金の支給年齢に達する年度までの間、地公法に定める分限免職自由に該当する場合を除き、再任用職員として採用または任期の更新をしている。なお、日勤講師（非常勤教員）は令和2年度から他の非常勤職員と同様に会計年度任用職員に移行したことから、採用に当たっては原則として公募による選考を経るものとしている。

6 非常勤教員の2020年度の任用数について

都 令和元年（2年度任用）の合格者は2757人である。

7 非常勤教員の2021年度の任用予定数について

都 会計年度任用職員である日勤講師（非常勤教員）の任用は、会計年度の予算の範囲内でおこなうものである。

秋の交流会 荒川線に乗って

三河島水再生センター 尾久地区の空襲記録

部長 鈴木 達哉



11月22日（日）、再任用・会計年度任用職員部恒例の交流会が行われた。コロナ感染者の急増期と重なったため、各自万全の防止策を取りながらの参加となった。

まず、JR大塚駅に集合し、東京さくらトラム（都電荒川線）に乗車。のんびりしたリズムに揺られながら最初の目的地、旧三河島污水処分場唧筒（ポンプ）場施設に到着した。赤レンガが美しいこの施設は、1921年から1999年まで稼働し、2007年に国の重要文化財に指定された。係の方から下水処理の仕組みについて丁寧な説明を受けながらの見学となった。途中で伺ったマンホールのふたのデザインに関する豆知識も興味深かった。

続いて尾久に移動し、「尾久初空襲を語り継ぐ会」の方からお話を伺った。開戦わずか4カ月の1942年4月、日本がまだ戦勝気分にかけていた時期に本土が初空襲されたのである。B-25が落とされた爆

弾で尾久地区では10名が亡くなり、建物も数十件が被害をうけた。

空襲の体験者である堀川さんは「4年生で一人で留守番をしていたら、隣の家に焼夷弾が落ち、大きな音と共に家が火事になった。落ちるのが少しずれていたら、自分の命は危なかった。空襲について戦争中は箝口令が敷かれ、戦後も自分からは語らなかつたが、記録を次世代に伝えるために、今は語り継ぐ会として、荒川区内の中学校で出張授業をしている」と話された。当時の新聞は「初空襲に一億沸る闘魂 敵機は燃え、墜ち、退散」と大本営発表の記事で、事実は全く伝えられていない。国家が情報を押さえ、国民が正しく知る権利を妨げる様子は決して昔の話ではなく、「安非法制」「モリカケサクラ」から「コロナ」まで、同じ在り様に見える。



今回の交流会は意義深い学習会となった。施設の説明や貴重なお話をしていただいた方々、昼食会場のホテルラングウッドの方々、会の企画を担当した片桐副部長に感謝申し上げたい。

荒川と品川

堀江 昌枝（品川）

暖かい陽射しの中、片桐さんの案内で、国指定重要文化財に指定された汚水処分施設の見学と尾久初空襲を語り継ぐ会のお話を聞くことができた。めったに乘らない荒川都電と、初めての日暮里舎人ライナーの乗り心地に満足した。汚水処分施設は既に先進的施設を完備していた西洋をまねて大正初期に建設されたもので、品川レンガで外壁を飾り、荏原製作所のポンプを使用するなど、品川との縁を感じた。この日以来、歩くと思わずマンホールをチェックようになってしまった。

尾久初空襲の資料の中に、1942年4月18日の空襲の時、尾久だけでなく品川区南大井にあった東亜製作所にも爆弾が落ちて14名の方が犠牲になり、天妙国寺に埋葬されていると記されているのに驚いた。品川で生まれ育ったのに、そのような話は全く耳にしたことがなかったからだ。

翌日、天妙国寺に出かけていった。旧東海道沿いには多くの寺が立ち並んでいるが、そうした寺の一つで青物横丁から歩いて5分ほどのところにあった。門のそばや寺内に初空襲で犠牲者が出たといったような案内板でもあるかと探したが、見当たらないので受付で聞いてみると、「こちらですよ」とお墓まで連れて行って下さった。そこには「殉職者之碑陸軍中將 長川治良謹書」とだけあり、墓の横面に「昭和一七年四月十八日殉職 16名」のお名前が書かれていた。お墓の背後には多くの卒塔婆が建っていて、令和の日付も見え、今でも東亜製作所関係の方が墓参りにきているとのことだ。なぜ殉職せねばならなかったのか何の説明もなく、歴史の闇に消えてしまった品川の初空襲だが、いつか尾久のように人々の記憶に残せたらと思った。品川には「品川歴史館」があるので、まずは訪ねて行って話を聞いてみようと思う。

1942年4月18日の空襲(日本への空襲)

水谷 辰夫（八王子）

11月の日曜日、再任用部主催の荒川地区のフィールドワークに参加しました。そこで、太平洋戦争開始後たった4カ月と10日後、日本本土にアメリカ軍の空襲があったという事実を知りました。それは、

「ドーリットル空襲」。指揮官の名ドーリットル中佐からそう呼ばれているそうです。さっそく「ドーリットル空襲」と、ウキペディアで調べてみました。

「1942年(昭和17年)4月18日に、航空母艦ホーネットから発進したB-25双発爆撃機ミッチェル16機が、太平洋戦争で初めて日本本土攻撃をした一連の空襲である。ヨークタウン級航空母艦2隻を基幹とするハルゼー提督指揮下のアメリカ海軍機動部隊が太平洋を横断し、日本列島(本州)東方海域に到達して行った。ジミー・ドーリットル中佐を指揮官とするB-25爆撃機16機は、日本本土各地(東京、横須賀、横浜、名古屋、神戸、等)に空襲を実施し、民間人に被害があった。軍事的な戦果は潜水母艦から航空母艦へ改造中の大鯨(龍鳳)が直撃弾で損傷、またアメリカ軍機動部隊の掃討により漁船改造の特設監視艇隊に被害が出た程度だったが、日本軍に与えた衝撃は極めて大きかった。(部分)

「尾久初空襲を語り継ぐ会」の弘田さんからお話を伺ったときの資料には、被害について次のように書かれていました。

荒川区尾久地区の被害 警視庁消防部「死者9名 重軽傷者36名 全焼30棟 52戸
警視庁警備部「死者10名 重症34名 軽傷14名 全焼43戸
全壊9戸

荒川区以外の被害 品川区 東亜製作所従業員14名
新宿区 早稲田中学4年生と通行人が死亡
葛飾区 木元国民学校高等科1年生の記録が残っている
川口市 日本ディーゼル12名 川崎市 日本鋼管27名
神戸市 1名 名古屋市 三菱重工航空機工場5名

空襲体験をお話しくださった堀川さんが、当時4年生と聞き、「私自身の次兄とほぼ同じ歳だなあ」と思いながら、耳を傾けて聞き入りました。

「(爆弾が)落ちるのが少しずれていたら自分の命は危なかった。」と語られ、幼馴染の痛ましい死を伝えて下さいました。「戦後も自分からは語らなかったが、記録を次世代に伝えるために、今は語り継ぐ会として、荒川区内の中学校で出張授業をしている」と話されたことは、今、強く平和を願い各地で語り部をなされている方々の思いと同じでしょう。

私の兄(長兄)は1945年6月「名古屋空襲」で学徒勤労動員生として爆死しています。20数年前、私が帰省したさいに長兄の死が話題になりました。その時、次兄が見せた顔と言葉を思い出していました。日頃、気丈な兄の顔が歪み「もうそれ以上は話さないでほしい。」と涙を浮か言った一言を…。

そんな思いを乗り越えて「体験を語る」ことを決意なさったのではないのでしょうか。

風化させまいと努力に感謝

浅川 謙司(港)

下町荒川区の空襲を語り継ぐお話を伺いました。東京大空襲の歴史だけでなく東京の各地に空襲があった事を改めて思い起こされます。風化させまいと努力されていることに感謝します。コロナ禍でも軍備費が増え続ける異常事態を止めなければならぬと思います。三河島の下水処理場跡地は、桜の季節にもう一度訪れたい。開催していただき感謝します。

～尾久初空襲～おじいさんの絵

飛田 邦子（江戸川）

秋の交流会で尾久初空襲（昭和 17 年 4 月 18 日）の体験者堀川喜四郎さんから体験談をお聞きした。お話を聞いた会館には数枚の絵が展示されていた。B25 が空襲する絵、燃え上がる町と路上に倒れる人の絵など。体験したことを伝えたいと、退年後に絵画を学び、堀川さんが描き上げた絵だ。空襲被害の後、教師に「そんな話をするんじゃない」と制され、戦時中は軍事に関することは緘口令が敷かれたことから、堀川さんは体験したことを墓場まで持って行かねばならないのかと思っていたそうだ。「尾久初空襲を語り継ぐ会」の方との出会いで、「戦争のない平和な世界をつくっていこう」と、いま堀川さんは荒川区内の中学校で尾久初空襲の体験を語る出張授業をされているという。地域の戦争体験や戦争の実相を体験者が語り継ぐことはとても大切なことだ。きっと、子どもたちの心に届くことだろう。堀川さんを描いた、三橋とらさんの紙芝居「～尾久初空襲～おじいさんの絵」（YouTube）もとてもよかった。それぞれの地域でも考えていきたいテーマだと思った。



片桐さん、貴重なご紹介ありがとうございました。

ドーリットル空襲から童話「かわいそうなぞう」を考えてみると

森谷 憲光（大田）

児童文学作家、土家由岐雄の童話「かわいそうなぞう」には、「戦争がだんだん激しくなって、東京の街には、毎日毎晩、爆弾が雨のように振り落とされてきました。その爆弾が、もしも、動物園に落ちたら、どうなることでしょうか。檻が壊されて、恐ろしい動物たちが街へ暴れ出したら、大変なことになります。そこで、ライオンも、トラも、ヒョウも、クマも大蛇も、毒を飲ませたのです。三頭の象も、いよいよ殺されることになりました。」（絵本はひらがな表記）という一節がある。

空襲が激しくなった頃とすると、昭和 19 年中頃から 20 年中頃のことと想像してしまいが、実際に上野動物園の猛禽類が殺処分されたのは昭和 18 年のことで、8 月 11 日にゾウ 1 頭の殺処分が決まったのを最初に、8 月 16 日には新任の大達茂雄東京都長官から全猛獣の殺処分命令が下った。この命令に従って、上野動物園ではゾウやライオンなど 14 種 27 頭が薬殺や餓死により殺処分された。その年の 9 月 4 日には、法要供養が催されている。上野動物園の猛禽類の殺処分は、「空襲が激しくなったからではなく、本格的な空襲に備えて」行われたのだ。

私は、長い間童話「かわいそうなぞう」が真実を歪めていると強く思い込んでいたが、必ずしもそうと決めつけてはいけないことを、今回の交流会で思い知らされた。日本本土への空襲は既に、昭和 17 年 4 月 18 日にあったということに思い至らなかつた。荒川区、品川区、新宿区、川口市、川崎市、神戸市、名古屋市などで「ドーリットル空襲」があり、各地で少なからずの死者や負傷者、家屋焼失等の被害があったということをお話ししていただき、自分自身の不勉強さを大いに反省した一日であった。

土家由岐雄の童話「かわいそうなぞう」は、確かに真実とはかなりの乖離があるが、児童対象の平和教材としての価値は決して低くはないと私は改めて思った。

秋の交流会に参加して～戦時における「人道」とは？～

林 健(江戸川)

コロナウイルスの感染拡大が迫っている中でしたが、2年ぶりに「秋の交流会」に参加できて嬉しく思います。今回、興味深かったのは「ドーリットル空襲」のお話でした。

三河島の水再生センターを後にし、都電荒川線に乗って「熊野前」で下車。1942年4月のドーリットル空襲を受けた地域を訪ねる。日米開戦から半年も立たずに実施されたこの空襲は、東京大空襲に比べ規模小さかったため、世間一般にあまり知られていないのではないだろうか。

町会の集会所で、「ドーリットル空襲を語り継ぐ会」の方々から、お話を伺うとともに、当時の新聞や、東京大空襲でも記録写真を撮影した東京警視庁の石川光陽さんの撮影した記録写真などを見せていただくことができた。説明板を設置したことでもわかるが、荒川区は、この戦争の記憶を次世代に引き継ぐことに積極的で、語り継ぐ会の方々が、区内の中学校で空襲の話をしているとのことだ。

お話の中で、ひとつ考えさせられたことがあった。このドーリットル空襲では、中国大陸に不時着したB25の乗務員が日本軍に捉えられていたのだが、この乗員(8名)は「無差別爆撃と非戦闘員に対する機銃掃射を行った」ことで「戦時国際法違反」として「捕虜」ではなく「戦争犯罪人」として軍事裁判にかけられ「全員が死刑」判決を受けた。さらに10月15日には、操縦士2名と銃手1名が上海で処刑されたというのだ(残り5名は減刑)。これには、ちょっと驚いてしまった。日本はこれ以前に日中戦争の過程で、1938年12月から41年9月にかけて、南京を追われた中国国民党政府が首都機能を移転させた重慶を空襲していたからだ。さらに言えば、これに先立つ1937年12月の「南京攻略戦」では、あの「南京大虐殺」で、非戦闘員(民間人)を虐殺しているのだ。にも関わらず「戦時国際法違反」と認定したことや「人道を無視」したとして極刑を下したということは、どういうことか？一方で「戦争なんだから、何をやってもよい」とばかりに絨毯爆撃や民間人を含めた虐殺を行っておきながら、「国際法違反」や「人道」を持ち出して死刑にすとは。ただ、この行為によってアメリカは、「東条英機は、血に飢えた独裁者」と宣伝し、アメリカ兵の約半数は「平和が回復されるまで日本人(軍人・民間人関係なく)は一人残さず殺すべきだ」と考えるようになったという。こうした問題は、まだまだ掘り下げていかなくてはならないだろうと思った。

尾久初空襲 テレビで放映

副部長 片桐 育美

11月28日の深夜、TBS系列で尾久初空襲について放映されました。8分の短い時間でしたが、番組の重要なコンセプトである、「戦争体験をどう次世代に伝えていくか」を真摯に追ったいい番組になっていました。尾久初空襲については、三橋とらさんという紙芝居屋さんが紙芝居を通じて、若い世代に伝えていこうとしていて、そのとらさんの活動が中心の番組でした。私は現在勤務している荒川区の中学で、三橋さんと呼んで公開授業をここ何年か行っていました。それも少し放映されて、これからも平和教育を進めていこうという決意を新たにしました。

おしらせ

*確定申告説明会 2021年2月10日(水)午後4時半～ 会場：東京教組会議室